内閣文庫
和
八三
一
函一三架

内閣文庫
番號 和 8354
冊數 12 (8)
函號 210 61

国立公文書館
National Archives of Japan

日家居家秘用巻八

○硯墨筆

けし墨は硯墨名乃ともひ
やう硯水は用ひやう紙ようう
てうとれく書やう唐紙乃用
れ乃ちやう朱印肉乃あつせ
やうもんで紙ところん

○染色

けし墨は絹布ともん乃染
やうもう毛乃類角類乃染
やうあるひハ染色のめんやう
次汁乃用ひやう一切染物の
事成ムハ〻々のもの

○雜門

以郎ちはあるあるは空空あり
年代を作りて生るる

居家必用卷八

○硯墨筆

▲鼎箔乃ち小書畫を書くに
油紙紙を用ゐるべし

のち小樂反紙を用ゐ
て油紙ようの文真綿あるひ
ハ紙にて拭とし

▲若小用ゐ沢は切ぐ作る毫
墨を磨りて作るべ〻ハ膠新あるを入ル
ぬぐうをうて常に清らか

細字或書ける紙を紙被
ひろく毛氈或ハ紙にて拭
取るべし毛紙墨に混れ
ハ害ありあるべ

▲硯紙作る法肉乃わけ
かたを切うのかはにて
紙乃ごとく清書
わたり紙紙板に洞天清祿

▲毛邊紙ハ南京乃官紙
ことにわたる唐紙を模
法ハ稀にして高
紙

うるに洞清にして厚く
きく甚堅かたく淡黄赤
して鶏卵乃殻に似る紙
と云ふ俗に是紙かけう
とゝいふ甚白くして堅紀
紙下呉とゝ

▲硯筥乃中に常に椒紙
二つ三つ入置て墨清お
のゝ清を是法とする
ふとるべし

▲臨梅樹皮紙乃水に浸し

て立てば文彩あり

▲冬月乃沢の水を肉桂或麻

糸絹を染こ浸し乾て用

白玉石巖空を水と清し又

千子紙用るとよし

▲硯ハ紫石或用べし胭濃

かてて濃ひあり夏も水乾

かぬ事石ハ石沢なり

○赤間宮ゝ紫石ハ

硯ハ古ろ光ル上人ハ青ゑ

代物ようとしあるハ他

▲墨紙拵ようは石面ハ志のと

あてゆるやハ拵ぶゝあまり

強ようか紙いまようと墨ハ

早ぶ又あまり中ゆるやうなる

墨濃かゝぶよ紙者

ぶ

▲墨乃善悪ハ試る法大

字中字ハ字ようとハ

一細字ハてハ

▲唐紙ハ庭墨ハ用る

よくこれを貴藏ありて
濃なる墨ハまれなり
▲地紙しろ紙を墨に
浸くるもやうを書たり或
ハ胭脂青紙墨に入く
かくたり
▲墨淡則傷神彩太濃則
滯鋒鋩 書学提要
▲養硯 硯乃池ハ軟なるを
よしと毎日水紙かえて注さ
ざるべし墨ハ初ハ水紙
にくくはなるべし用ふる好ハ麁
もたるべし久しく浸せる紙ハ
墨汁発せし 洞天研錄
▲筆以十月正二月收者爲佳
養筆以硫黃酒舒其毫 洞天筆錄
▲筆毛ハ秋八九月取ふる紙を
用ふるに弟一よしとす油竹
を用ふるハ切てるよし但小
筆乃油ハ蛤やすし英竹
紙用ふる
▲果紙ハ強筆紙用ひ強

紙は杲紙用ひて強
杲相かすりしめる
▲唐紙ハ大字紙かなて文字
やぶれてるハ裏より類紙とい
はくろひ墨紙は文字紙補ふ
べし
▲朱印肉　白鳥乃むく毛紙
肉とるハ良方とした又艾
紙よくこして空中乃清水
ふて曝し日ふ干し又とこそ
ふて奥有、白ふして朱と

ち麻子れ油　入て交合せ
但朱紙石乃櫨木ハ
莫矣紙さりて用ひ度ふ
ときるハ紙なり
○又黄蜡　辰砂　胭脂ふと
加へるとよし
○方ふ竹乃上皮紙けぶり
あまぐ紙ふ力を立く抑く
けぶりなる紙ぐ煙くこと
うふとりて用ひ

○染色

▲くんぼう染　先藍ふて下地を染うのち楊梅皮十匁水二升入て一升ふとやし二番ふ水二升入九匁ふとやしをのの汁ふて三四度そめを上へ酢五匁ふ浸ふ酒五合或ハ古酒の類入やしふへらて好さ加減ニ成ハ三日ハ四五日ほどニ染ル紙ハ一番ん染ル又楊梅皮乃汁

へ法けこ四度そむるかくれ
ざくそうてあとを手三四度
してはまぜわもぐしあの
あ貝八絹八四度紬八三絹乃
染汁なり此法は染赤ふ
用る法なり但染赤うは
れはを下染せぐるもへ地も
よりり一度辛乃好八赤こいで
久河をなる下染せく
ちるほど久かくぐして地
はそし

▲又法下地ハ　藍ゆてそあう
乃上紙五信子石榴皮を煮
しうる紙うけ又浸れ汁ふひ
うし一宿してもそ紀軍乃
此法地紙抜ぐ
▲うこん染　うこん乃粉紙絹
一度ハ八両ほど水へいま茶
碗小酢をまぜほど入そむる
但二時そうは法けをるぐ
しそのハ湯ぬて染る
▲嵐久染　藤子乃赤紙やれ

炭にてよく煮て水中
の毒気あひ加ふはなはだよろ
して漬べし但酢にてもれ
漬まてはなはやありていろと
よし

▲桑乃皮を煮じて褐色に
そむまてば久しく落ち
○いもの茎を煮じて漬ると
久しく落ち
▲ぜんまいじ漬 下地に茎
ふ漬てうの紙莫乃汁

ふて二三返とり浸漿ふ五倍
の紙ふ加へてとるもの
▲桑漬 桑乃本に煮じて
ふびくそあそれと紙揚物
皮乃汁ふて二返そあ桂乃
灰汁ふてうむるし
▲竹漬 茨に紙やたて
大ふなる紙らびよくとり
て大豆をとりうの汁中て
あいせ石灰ふ加へ刷毛もて
ぬりて漬らし黒さかけた

たゝ紙に墨紙を加へし
又阿仙薬紙大豆汁に合せ
そゝりたし

▲かりうけ丸　右たゝ汁深
乃ごとくうすくして深り

▲萌黄深　下地を定て用ゆ
水藍ゆて深うの紙かりやを
乃黄ゝ汁ゆてこ返深うの
紙用ゝ汁に明礬を加へ
てそゝり

▲柳茶　下地茜濃

黄ふそめ　のこ紙かりやを
乃黄ゝ汁ゆて一返そめう
の紙用ゝ汁に明礬を加へ
てそゝり

▲黒こび　蘇木乃黄ゝ汁
ゆて二返そめうの紙楊
梅皮乃汁にて二返そめ又
蘇木乃汁ゆてこ返そめ樣
乃庶汁ゆてそめ鉄漿を加
ける緑樂をかけもし

▲蘇木深　上紙すゝう紙

奏じ唐乃明樹を合せ深へ
し深汁乃さわざろ内ふ深よ
ひ天ふかて天ふ若洛
ろ時ん羽濁或ハ去揚ふて
温ろ深ろ深揚ふ久しを
入ハ盃ハ多汁ハ浜をいむ恵

▲奏ちや　楊梅皮乃奏じ汁
ふて二返そろうの上紙楼
乃灰汁ふてそろ
▲そのちや　同じ汁ふて二返深
楼乃灰汁ふてくろふ北へ

てそろ
▲かしちや　下地紙模本乃汁
ふて二返そろうの上紙楊梅
皮乃汁ふて二返そろうの上
楼乃灰汁ふてそろ
▲紅深　湯代何へなりとを
ふ代ほどふとうて紅をとれ
うの中へ法ちく色ふしふた
うろ代色酢紙みんハへ
又ちばしく法ちく色ちばしく深る
▲灰汁　深家ふ藍紙刷北ろ

八辛灰なり是ハ蜆殻乃灰
おぞうり加へて灰汁ハ
用ひまてしざれハ色あしく辛
灰ハ種物等れ牛蒡乃灰之
○麻苧成濯ハ綿実の灰
汁成とも○布帛成濯ハ
ハ稲藁れ灰汁を用ひ紫染
黄染ハ柃乃灰汁をハ加ふ
きは色変ず○早稲藁の
灰汁ハて紅花を洗へハ紅花
く綺麗

▲染毛法 馬乃毛成早稲藁
乃灰汁ハてよく洗ひ米泔汁
ハ三日ハ浸ハ毛色素水ハ
てよく洗ハ日ハ干して好そ
むらし染汁乃法ハ穀木皮
肥松ヶ丸越無乃葉十枚入よ
く煮じ塩十五匁ハ入ハ
湯加減ようて染べし換れ
ハあしく俱二日ハ浸ハ毛色
反出し加減を見日ハ
三日ハすぐて水よてきり

くゝと汁をふくめて○青名ふ染
ま紅緑青を酢ふてとけ
ぬ〻〻鹿ふいつゝざるやうふ
かけ法ツ少さ浸して染べ
し牛乃毛むくゝ角乃
▲藍乃まふ付ゝる法 張英
乃煙ふて蓋ハさゝ
▲茜乃染汁を染付ゝるハ
酢ふて浸ふ乃又梅酢ふて
浸ふとゝ
▲木綿絹布ゝゝ深地浸湯

ふ紅ゝまくゝ乃りて染ま
ふむゝ染ゝて染やゝゝ
ふ汁をゝふあゝ乃ゝふて
染乃ゝ染汁ふ乃ゝ染
むゝ出ゝ
▲角類を染る法 磁名ふて
紅紙梅ふ紅乃酢ふてとけ
紅ゝふ生堀硝五分入炭
火ふうけ紅乃ふへあゝゝ
附象牙あゝひハ鹿角馬骨
鯨の白骨乃類ふて法ゝ

さる御幷緒しめの類を染
ふ紅なんの類
▲唐紅染　模本百目黄柏二両
松脂二両　右こを一所ふ煎
ましたる紅のごとくなべ
あげる
染やうハ
一右の煎汁四十目　かりやす十五
すみ　四十目　明礬三五
右一所ふあらせ水二升入しく
なべ〻いくたびとも染用して好

甑ふて蒸ぐ〻紅染のごとく
くそゆる
▲浣染の法　生浣一升ふ水
九升入たゝひふてしく和合せ
生布ふてこ晒布ふてこ先
水して粘氣をたゝ右の
浣水へ浸けしくこと合せ椿
ふかけるの下ふ浣水の入る
たゝひを立て布をこぼ
こ干して青紙こ浣水の
盃ふまして染て布をしぼ

泥矢むすびくつろげてよく
矢ふとをの

○雜門

▲旅中法　壺酒炒付ける
是ふ沈香ありてこれ是ままで
又泥是してのちはて鹽
泥かく是乃嘉ふわり火ふ
てあるべし
○又　道泥いとぶ炒とる
湯漬　飯食ままて合
てうのほ　きり炒とと掏
腹いとむしうまへなしといへ

又汁にかやうの飯紙湯漬
かゝて喰うもよし
▲早天ハ山野ハ霧ハ生姜一
塊紙にくるみ霧濕氣
ハ正月邪氣ハ
▲大蒜紙酒ハ浸し鼻乳
ハ乳を所宜中ハ宜氣
紙をぐ又面部手足ハ酒
邪氣ハ邪氣ハ
ら
▲旅中宿にハ育ち
草蛙蒼蠅蚤虱の
取集め手拭乃かゝ取定
ぶ
ばの胡夫あるべしいづれ
大事乃ハ庭敷乃中ハ
▲人十月而生馬十二月而生拘
三月而生牛四月而生猿五月
而生禽鹿六月而生虎七月而
生兎八月化博物志
▲金剛砂を石紙にくるけハ

石乃肌膚あらんに厚紙
▲煙草紙浮子
を以て封じ口のよく紙油
紙あるひは混紙にて作る
かくこうして桐の箱又は瓶
もの其外類古紙酒樽乃中ふ
入るべし
▲山漆よく金奥の病を治す
▲養猫法 猫妻仔二匹ふ
子産むに仔乃子は仔はなく
こうかう仔産安産おそく

産おそくして六十日ゆして
生まれて一七日してそだち
て服を保く三旬を終く
神て飯を食ふ一月まで乳を
て猫乃おとさず十五だうな
源時乳汁なのをてよくそぐ
り○おくして病猫ハ生流
黄汁又鰊奥泥鰌まるく
びなるく治せ又方胡椒乃
末紙水ふて丸し用ひ猫う
の辛味ふ苦しめどもと甚だ

るしあり但頭紙とゝ屋て
引あゞるふ鍋乃風紙あり
ハたゝのハ治せたる又腰のね
けるハ尾乃根ふ癒まれば
帰いゆ。又猫紙初めて
鉤と紙蛤紙焼て食しむ
またれ作ふいでたる

▲居雉法　雉ハさはハ生た
ふすし石ハ打もく作るハ亜
さはれもくハ石紙作ねと
すし立紙さはすたた茶く

ゞけて亜し先乃さげやゝハ
れよそさはハ人あゝハ六寸四
分さゞるあり一尺ふ六重さ
がりのはもりなるはの傾
紙とはかひあてさげてす

▲草木乃法生た皆月ふ産
ゞ月備また紙るる月ひ
月虚また紙爆くまる
敷田へふ上強ハ好下強茶
ハ作また伐ふまるゝだ
蠶やまゝ

▲小鳥の病成治せんとは
番椒を水に浸してそのし
汁成ほそぐらし又蠟姑
を餅とまぜて飛いくる
▲金魚の乳とろとろとなる
のときぼり汁成ほそぐ入
まぜ飛いくる
▲鶴の腎をぬかれ
ば悪清盛ちく今脛の骨
を用ひ
▲宮中手足冷へざる法

古酒一升生姜六十目皮成
ちりまく細めて搗み入り成
四日くらい紅てまぶはどに水
四日くらい成小豆粒ほど手
足ふりまばまく宮氣成ふせ
ばて冷へに
▲旅中食物なき飢しる時
艾の生葉の成食へハ飢成
ちのぐ又挽菜しく飢成凌く
▲毒風成去法　石部根　桑花
ぬかり未とおし　竹葉ふ衣拭

紙れ沒ひ下ふ火紙を生れ
ば衣服乃虱死して落る
又白鳥乃羽乃くるふ水部
を入下帯お結ばまた虱を
とぐくる法
▲牛代虱紙殺また百部根
紙奥じ法
▲富美代奥じ小児乃移衣
紙法また虱蚤紙さくら
▲おろそ蛇乃類煙草乃脂
紙いむ又胡桃ふく蛇紙ふ

ぬぐ
▲荊葉ふく蝦蟇ふ逼る
▲油蟲紙去法 青蒿乃茎
葉紙竈乃周ふ捕とれば
たゆる
▲生蝙紙晒し法 未蝙ふて
と青蝙ふてと洞ふてそれ
ぞれ水乃本へ入れ
まるとくとなりて堅ま
源紙いうれふてすくひ紙
ぞれ日向へ出し菓

帯ゆて水紙をぬぐわるて十
軽紙ゆ万時ハ又水紙をぬぐ者
度をかくれぬ様くしてヤ軽と
年三日間どもまだ出の
ごとくあり

▲墨ゆ沈乃付ゆ万ハ出ぬ沈紙
わぐひとりて石灰紙ゆうけ
重ねて

▲途中ゆて肌ゆ風の通りてさ
むゆ万ハ紙紙袋ゆあつぐ
空中乃旅ゆ万胴紙表用ゆべ

▲魚鳥紙減乃法　鳳鴨ゆ
鳥乃古紙と新紙減ゆハ
首の毛ゆ多く蜘蛛紙あげて
乃ゆ万ハ多紙ハ新
古やゆ万ゆ万ゆ深ひあるも
ゆ月の方ゆ月のくろう
ゆ万ハ古ゆ奥ハまゆ首と
服紙ゆ乃ゆ新ハ服ゆ
皮あゆ難と深ひゆ万の炭
ゆ柳て乃ゆ万ゆ少堅ゆ○蜻
ハゆ紙ゆで吸付ハゆ孫で

里付八ツ〻

▲西海湖界　大坂より備後

福石まで五十五里乃間湖上へ

こゝ〻より国防のぞう

しまで四十三里乃間八里と

上へ満る○ぞうしより紀ぜの

山ろ乃沖海まで四十五里乃

間八下へ満る○山ろ乃沖海より

肥前乃かぜ浦まで八十四里

乃間上へこゝ〻る○長門ところつ

乃そばより北くとぞうんつる

●そうしゝ乃潮と八九月八下へこゝ

ゝる

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan